

# 食人言説の詩学と政治学

—序論—

本 橋 哲 也

## はじめに——食人行為の類型

人間は社会的な動物であって、その自己認識＝アイデンティティの様式は、社会のなかにおけるさまざまな力関係によって移り変わる、人の位置関係によって異なる。言い換えれば、他者を認知し、それとの関係を勘案することによってのみ、私たちは自己の輪郭をつかむことができる。他者との関係は、愛情や憎悪、嫉妬や憧憬、同情や無関心など多岐にわたるが、なかでも生物学的に同類であるところの人間を食べるといふ食人行為は、おそらくそのような関係のなかでも最も禁忌と欲望が集約されたものではないだろうか。日常生活のなかでも「食べてしまいたいぐらいに可愛い」あるいは「食べてやりたいほど憎らしい」といった感情はそれほど奇異なものではないし、また各地での宗教的・儀礼的慣習をみてもキリスト教の聖体拝領や、死者の灰を食する習慣など他者との絆を重んじる「食人」的な営みはいまだに広範に存在する。おそらく「食人」にまつわる行為や幻想は人類の社会的歴史と同じく古くから存在するのではないだろうか。それは社会的規範とそこからの逸脱をもくろむ根源的な欲望との境界領域において、自己と他者との接触ゾーンでつねに噴出する可能性を孕んできたし、今後も孕むはずだ。

現実的行為としての食人と、文化的表象としての食人を厳密に分けることができないのは、あらゆる人間的行為が特定の言語システムに基づいた言説による遂行であるからである。人間は空想や想像による他者との関係構築をめざして何らかの行動を起こす動物だからだ。しかしさまざまな食人の遂行をいくつかの類型に分けることも可能だろう。

まず、極限状況における飢餓が生む食人が考えられる。これは古くから食糧の欠乏が生存を脅かす状況において、緊急避難的に行われてきたと考えられる。ヨーロッパ人による植民地開拓の初期においても、地理や天候になじみのない異界での食料調達が困難であった植民者たちが食人に及んだり、あるいは難破した航海者たちが食人行為に訴えたことは、記録に残されていない事例も含めれば、かなりの数に上るだろう。また戦時中、とくにアジア太平洋戦争中の日本軍による捕虜や住民、あるいは友軍兵士の人肉食についても記録がある<sup>1)</sup>。

また近年では一九七二年にウルグアイのラグビー・チームを乗せた飛行機が厳寒のアンデス山中に墜落して、生存者が十週間事故死した仲間の死体を食べて生還した事件が有名で、これは映画にもなった<sup>2)</sup>。このように飢餓状況における食人行為はあまねく存在するが、それでもそのような行動が言説としてどのように言語化されてきたかが、それぞれの状況に即して興味をひく。

次にグルメの極致としての食人とでも呼ぶべきものが存在する。これはとくに生存のために必要な行為としてではなく、人肉をほかの食糧よりも美味なものとして嗜好する現実行為、あるいは言説表象をさす。そこには治療効果を求めて食人を行う場合も含まれるだろう。そうした行為がはたして現実に行われてきたかの証拠のあるなしに関わらず、さまざまな土地や文化圏で人肉は嗜好品として尊重されてきた<sup>3)</sup>。ここでも主要な関心は食人が行なわれたかの証拠探しにあるのではなく、人間がその肉をおいしいと考える心理の探求、すなわちさまざまな社会的力関係から生みだされる言説による行為の表象の分析にある。

次に、こうした嗜好性の延長線上に、殺人行為の極限的形態として精神病や犯罪事例として分類される食人がある<sup>4)</sup>。むろん何が病気や犯罪であり何がそうでないかは時代や政治体制によるわけだが、そうした事例の頻度はいわゆる「文明の進歩」とは関係ない。ここでも関心は、むしろある行為を正常な営みから逸脱したものとして見なす言説的表象のメカニズムにあり、ある行いが本質的に悪として糾弾されるべきであるかの判断は行なえないという立場にたっている。「逸脱」ということと言えば、性的行為と相関物としての食人や、あるいは反対物としての食人もここに含めてもいいかもしれない。犯罪と見なされる多くの食人行為が、他人の殺害、性交渉、食人という一連の流れのなかで行なわれる事例は前者の例であろうし、食人が行なわれる（実際の行動によるか象徴的行為であるかは別にして）集団内で性関係が禁じられている近親は食べてはならないとされたり、あるいは反対に近親だけを食べてもよいとされたりする掟が存在する場合などは後者の事例に当てはまるだろう。

次にあげられるのが、広い意味での宗教的儀礼としての食人である。これは多くの場合、西洋的植民地主義が現地の「野蛮」な習慣を糾弾し、自己の正しいキリスト教の教義によって矯正すべき他者の習慣として膨大な数の文書や視覚資料によって表象してきたがゆえに、私たちの多くにとってステレオタイプとも化したイメージとなっている。それはとくに見知らぬ他者の野蛮性や凶暴さを強調した復讐行為や敵の征服、または部族の団結を図ったり、公的な裁きの形態である食人として、あるいはときに神々と交流したり先祖を礼拝・崇敬するために高貴さや純粋さを示す特殊な文化伝統である食人として解釈されてきた。この場合も実際の食人行為の正しい意味付けよりは、ある特定の意味を付与することによって自己と他者との関係を構築しようとする言説の働きに注目していきたい。

本稿の中心的主題である「他者」を差別し選別するための植民地言説における食人＝「カニバリズム」も、それが文化的・言語的表象として生産されてきたプロセスの探求が重要で

ある。植民地主義による支配はおしなべて軍事的暴力や経済的搾取、土地の奪取や女性・子どもの領有、言語や芸術の文化的抹殺などを含むから、被植民者として支配されてきた者たちがそれにさまざまな手段で抵抗するのは当然である。そして食人は、現実の行為としても表象的实践としても、そのような虐げられた者たちの抵抗手段として用いられてきた。そのような文化実践としての抵抗において食人行為はそのもっともラディカルな他者と自己の境界線の逸脱、新たな関係構築の可能性を示すのであり、近代の植民地主義におけるヨーロッパとその他者という図式における自と他の二項対立が生産するさまざまなステレオタイプを批判する回路もそこに開けるのである。

### 他者のステレオタイプ

すでにさまざまところで論じられてきたように自己と他者との二項対立および第三項排除は、言説的支配関係における標準形をなす<sup>5)</sup>。たとえば、近代の西洋的植民地主義において普遍的に見出される白人男性／先住民女性／先住民男性という図式は、文明化された白人男性が、野蛮な先住民男性の支配から無垢な先住民女性を救済するというかたちで、植民地主義的な支配の幻想をかきたててきた。そのような言説における「他者」のステレオタイプは、優越項と劣等項との組み合わせによって形成される——「文明／野蛮」「旅行者／土人」「白人／有色人」「大人／子ども」「ヘテロセクシュアル／ホモセクシュアル」「女らしい女／男まさりの女」「農耕民／遊牧民」「料理／生肉」「知識／空想」「現実／夢」などに差別され差異化される他者の表象にはステレオタイプが不可欠だが、ステレオタイプは必ずしも一元的ではなく、ステレオタイプそのものが矛盾や両面価値性を抱え込んでおり、そのことはカニバリズム言説の生産と流通についても言える。

後に見るように、食人種を示すとされることになった「カニバル」という単語は、複雑で混交した指示対象にたいする整序の道具としての記号として機能せざるを得ない。よってそこには必ず記号の暴力がつきまとう。また記号にはローカルで特殊な属性と、支配的言説にとって普遍的な知識との二面性があり、それゆえ「カニバル」のような普遍性を標榜する記号はローカルな属性を無視することになる。しかし記号は一方的に支配者によって使われるだけでなく、被植民者によっても領有されるという相互性を含むものだから、武装した「他者」への恐怖が食人幻想を生むとともに、そうした幻想を逆に利用して植民者たちを脅かそうとする者たちも出現するのである。

以下では、「カニバル」記号が出現する前の食人種を示す「アンソロポファガイ」と比較しながら、一四九二年のクリストファー・コロンブスの航海以降の「カニバル」記号の生産と流通について考察する。それはさまざまな言説ジャンルを横断し、食人にまつわる実践と言説が協働しながら、西洋的植民地主義の強大な要素となった「食人」という他者の営

みについて多くの示唆を与えてくれるはずである。

### 「新世界の発見」と国民国家の言語

「新世界」ないしは「アメリカ」の起源なるものを考えるとき、一四九二年十月十二日に始まる一連の出来事を「発見」の代わりに「到着」と言ってみたとところで、認識の視点は移動しても、それだけでは他者の生産による自己の構築というプロセスそのものを再考するには不十分だろう。肝心なのは、その到着という偶然の事態が「歴史」として整序され、「始源」が設定される過程を検証することである。「発見」はそれにつきまとう多くの偶然を否定し忘却することによって必然となる。メキシコの歴史家オゴルマンは、アメリカはそれを探検した者たちが発見するのを渋ったがゆえに発明されねばならなかったと論じている<sup>6)</sup>。本当の先住民という主体を「発見」せず、その代わりにおのれの規律から逸脱する「インディアン」を「発明」することによって、近代アメリカの歴史が創始された。言い換えれば、本当に発見され構築されたのはコロンブスたちの「食人言説」であって、「食人種」たる先住民ではなかったのである。

一四九二年八月一日、コロンブスが「黄金の島シパング」を目指してパロスの港を出港してからちょうど五日後に、アントニオ・デ・ネブリハの著した『カスティリア語文法典』が、サラマンカで発行された。コロンブスのパトロンでもあったカスティリア女王イサベルに捧げた献辞のなかで、ネブリハは次のように宣言している。

高貴なる女王さま。書物によって保存されてまいりました過去の遺物について省察いたしまするに、私はいつも同じ結論に致らざるを得ないのです。それは言語とはつねに帝国の伴侶であり、これからもその友であり続けるだろうということです。帝国は国語と共に誕生し、共に成長し花開き、そして共に衰退するものであります<sup>7)</sup>。

ネブリハによれば、国家権力によって制定された国民言語は、自国の内と外に居住する、まつろわざる他者を征服し支配するさいの必須の手段である。ネブリハによって、スペイン植民地主義政策の道具として規定された「帝国の言語」は、自己の持つべき優等な言語として、他者を従属者として構築していくのだ。

コロンブスによる「食人種カーニバルの発見」も、こうした国民言語に媒介された帝国主義によって支えられていた。到着した未知の土地に住む土着の人々の主体性を発見する代わりに、「インディアン」という実体を発明／命名する。こうしてヨーロッパ人に「約束された土地」としての「アメリカ」の歴史が始まるのだ。

そうした植民地主義による先住民の虐殺、文化の抹消、社会の破壊に、ヨーロッパ言語に

よる命名のプロセスが果たした役割を検討するさいに、初期近代の旅行記のなかから、文化的に過剰決定された食人言説を取りあげることが必要な作業なのは、ヨーロッパ植民地主義の拡張過程において、「カーニバル」ほど、幻想のなかで成型された他者の否認に、否定や排除と同時に、承認と憧憬の契機をも含む両面価値的な動きが明らかに見てとれるからである。

### コロンブスと「カーニバル」

コロンブスは一四九二年の第一回目の航海で、トレスという名の通訳を連れていた。トレスはヘブライ語、カルデア語、アラビア語を解したという。カタイ王国の周縁に位置する「インド」に到着したと信じていたコロンブスたちにとって、この三語は有用なはずであったが、その期待は完全に裏切られることになる。たがいに相手の言葉を解さない両者は、身振りによるコミュニケーションに頼らざるを得なかったが、コロンブスによる先住民の手真似の解釈として、「人を喰う人間」の話がはじめて出てくるのは、『コロンブス航海誌』では一月四日である。さらに「カーニバル」の語が最初に登場する、まさに記念すべき日付は、一月二三日だ。

この岬と重なるようになって、東方に岬ともみえる陸地が見えたが、同伴のインディオ達は、これはボーイオという広大な土地で、そこには額に一つしか日のない人間や、カーニバルとよばれる連中が住んでいるとのべ、彼らを非常におそれているようであった。そして船がそちらに向かって行くのを見るや、彼らに喰われてしまう、彼らは武器をたくさんもっている、といて黙りこんでしまった、とのべている。

提督は、これはある程度事実なのかもしれないが、武器をもっているというなら、知恵がある人間だろうと考えた。そして何人かが捕えられて島へ帰って来なかったため、喰われてしまったものと考えたのだと思うとのべている。彼らはキリスト教徒達や提督を、初めて見た時には同じように考えていたのである<sup>8)</sup>。

『航海誌』の抜粋者、つまり実際の著者とも言うべきラス・カサスは、カリベ族が食人であることを否定していた。そこで彼はこの引用部分に注をつけ、コロンブスが「ここでいかに彼らのことをよく理解していなかったかが分かる」と書く。たしかにここには伝達や翻訳をめぐる問いがある。コロンブス達はどれほどインディオ達の言うことや身振りを解したのか？ 書写したラス・カサスは、どの程度正確に今では失われてしまった航海誌の原本を写しとったのだろうか？ たとえコロンブスがインディオたちの身振りを「正しく」解したとしても、インディオらが真実を言っているという保証はどこにあるのか？ また彼らが嘘や

誇張を言っているとすれば、その意図は何だろうか？ こうしたさまざまの疑問のただなかにおいて、私たちにとってもっとも興味深いのは、コロンブスの命名行為という意味付与過程に内在する権力関係と相互性の契機である。

すなわちこの場合、コロンブスにとって、言葉も通じず、風俗習慣も全く異なる他者を「カニーバル」と命名するという行為遂行自体が、その指示対象を「醜悪で、反抗的な食人種」として構成することになったと言えないだろうか。コロンブスは征服すべき他者の領域に入ったと自覚することで、偶発的にこの「カニーバル」なる名称を必要とするようになったと想定し得るからだ。

以上の仮説を、先に引用した一二月三日の記述をもとに検証してみよう。まずここには二つの固有名「ボーイオ」と「カニーバル」が記されている。「ボーイオ」という語の初出も「人を喰う人間」と同じく一二月四日であり、この日の記述で注意すべきことは、ボーイオという土地が「黄金や真珠」と結びつけられていることだ。一二月四日には、食人種はそこよりさらに遠い島に住むとされていたのが、二三日になると、ボーイオ＝カニーバルという意味の連関が生まれてくる。この「黄金」から「食人」への中心的関心の変化は注目される。

一方で、一二月三日以降、アラワク語で「小屋」を意味するとされる「ボーイオ」は登場回数が少なくなり、その代わりに「カニーバル」がくりかえし使われるようになる。（「カニーバル」「カニーバ」「カニーマ」などとして登場する語の一類型と考えられる「カリベ」は、アラワク語では「タピオカの木を食う人」ないしは「勇敢な戦士」を意味するという<sup>9)</sup>）。この日コロンブスがどんな音を先住民たちの口から聞いて、それを「カニーバル」と記したのか、確かめるすべはないが、決定的なことは、ここで住民たちが（何を意味しようとしていたにしろ）発したとされたある音声が、コロンブスによって「カニーバル」として命名されることで、遡及的に「食人種」という指示対象が指定されたことである。そしてこの名前は『コロンブス航海誌』という書物の公刊と翻訳・印刷によって急速にヨーロッパ中の言語のなかで通用していく。（たとえば『オクスフォード英語辞典』によれば、イギリス語の「カニーバル」初出は、一五五三年、リチャード・イーデンによるセバスチャン・ミンスターンの『宇宙誌』の英訳『新インド論』である。）しかし同様に私たちにとって重要なのは、「カニーバル」という命名の行為が、命名者自身による食人種の存在そのものの存在への疑念と、その名前が一方的な差別の言説というよりは、ダイアロジックな相互性を伴って認識されていることだ。

#### アンソロポファガイとカニーバル

食人に関する共同幻想そのものは、おそらく人類の歴史と共同体の形成と同じくらい古く、

かつ広汎に存在する。身なりも習俗も自分とは全く異なる人々に遭遇したとき、食人に対する禁忌と魅惑とが同時に言説としても実践としても出現する。ヨーロッパ人たちと土着の住民たちがはじめて出会ったとき、前者は後者にあらゆる機会をとらえて、ときには贈物によって懐柔しながら、ときには武器によって威嚇しながら、この見知らぬ土地についてのさまざまな情報を引き出そうとしたはずである。その根底には、古代から近世にいたる、ヘロドトスやプリニウス、マンデヴィルやマルコ・ポーロなどの著作に描かれた黄金の島、アマゾン伝説、怪物たち、そして食人種の話があった。こうした他者に対する幻想をひとつの基盤として、自と他の交流が成立していた以上、そうした幻想や先入観に充分に答えるものを現実には持ち得なかったこの土地の住民たちが、ヨーロッパ人の欲望に沿ったかたちで、食人や黄金の話をして聞かせたことも大いにあり得ることだろう。相互の誤解と諒解のもとに、「カニーバル」の語はひとり歩きをはじめ、印刷術という伝達の方策を持っていたヨーロッパ人の方が、それを食人種という劣性の徴つきの記号として使うことによって植民地言説のなかに組み入れていく。かくして自と他の相互性が、自による他の支配と差別という契機に転化していくのである。

西洋ギリシャ世界において、ホメロスやヘロドトス以来使われていた「食人」を示す「アンソロポファガイ」という語は、もともと「黒海の向こうに住む人々」のことを指していた。つまりギリシャを中心とする視点からして、理性的な世界が果てた場所に住む究極の他者を指示する記号だったのである。ヘロドトスの『歴史』には次のように書かれている。

アンドロパゴイ人の風習は世にも野蛮なもので、正義も守らねばなんの掟もたない。遊牧民で、服装はスキタイ人によく似たものを用い、独特の言語をもつ。ここに述べる民族の中では、彼らだけが人肉を食う<sup>10</sup>。

この記述には、コロンブスがカリブ海先住民について書く際にも自ずと現われてくるいくつかのテーマが散見される。特に重要なのは、言語の特異性と「異常」な習俗との連関だろう。すなわち、正義観念も法もなく、遊牧を旨とし、服装はスキタイ人のようであること。スキタイ人とは、ギリシャ人から見て、文明化された民族と、完全に野蛮な民族との周縁に位置すると考えられていたのであろう。しかしここでは、文明と野蛮、ギリシャとアンソロポファガイとのあいだには、明確な境界線が引かれており、従ってその境界線が横断されて逸脱や混交が起きる可能性や、「カニーバル」の発生期に見られるような相互性の契機はあらかじめ排除されている。つまり「アンソロポファガイ」とはあくまで絶対の他者として特異な言語と習慣を持ち、彼方の存在、いわば「外人」であった。

それに対してコロンブスが発見した「カニーバル」は、自己と他者との相互浸透的な関係に基づく相対的な他者の表象、つまり「異人」とも言うべき存在だったのではないだろうか。

コロンブスが一四九二年一月二三日に、はじめて「カニーバル」なる単語を聞いたと思い込んだとき、それは食人という現象が持つこのような関係性、つまり異人に対する恐怖と憧憬に支えられた、食人の存在そのものに対する当惑や疑問を伴っていた。つまりここではいまだに、「カニーバル」の記号は、「食人」という指示対象に対して、恣意的で絶対的な支配力を持ち得てはいなかったのである。

「カニーバル」という語が規範から逸脱した他者の記号として、文字表象のなかで流通するためには、その発生時に認識されていた相互的対話性が隠蔽されねばならなかった。記号が指示対象にたいして支配力を行使することによって、指示対象そのもの、すなわち「食人種」とされた他者の肉体と「食人」という実際の行為は、周縁化され、エージェンシーとしての力を奪われていったのである。

エドワード・アーバーが一九世紀末に編纂した、いわゆる『イギリス語で書かれた最初の三冊のアメリカ関係文献』という、多くがリチャード・イーデンの翻訳したスペインの新世界征服の物語においては、「カニーバル」の語が頻出する。それはヨーロッパの読者層のなかで、この「獐猛で残虐きわまりない」民族が急速に認知され、古典的用語でアフリカ・アジアを地理的基盤とする「アンスロポファガイ」が、近代的でアメリカを経由した「カリブ」の「カニーバル」によって置き換えられていったことの証しでもある。

「カニバレス」の残忍な野蛮性こそは、自らの暴力的な植民地拡張政策を正当化しようとしたヨーロッパ的想像力にとって、欠かせぬ言説的武器であった。イーデンが一五五五年にイギリス語に翻訳したペーター・マルティールの『十巻本』の序文がこうした正当化への欲望を如実に示している。マルティールによれば、先住民がスペイン人に隷属することは、

以前の自由な状態よりもずっと望ましいことのはずである。以前の自由とは、残酷なカニバレスへの従属状態であったのだから、自由というよりは恐るべき放縦と言った方が正確だからだ。無垢な人々にとっては、このように恐ろしい隷従こそが実態だったのだから、自分たちの怠惰さが原因で、彼らはこうした人を獲物とする狼たちの犠牲になる危険にいつもさらされていたのである<sup>11)</sup>。

この論理に従えば、スペイン人による征服は、スペイン人、先住民相互に利益をもたらす。とくに先住民にとってその利益は莫大であって、何より「残忍」で「放縦なカニバレス」からの解放がもたらされる。こうした論理を支えるのは、「優しく従順な先住民アラワク」と「残虐な食人種カニーバル」との二項対立なのである。



## 「食人種カリベ族」

そのことを考察するために、コロンブスの『航海誌』にもどって、記号と指示対象の関係の変化に注目してみよう。一四九三年一月二二日の記述になると、もともと食人種の存在に疑念を抱いていたコロンブスの思考に変化が起こりつつあることが明らかとなる。彼は積極的に「人を食うカリベ族」を、目の前の人間に同一化するようになるのだ。その理由は、その男がいままで見たほかの住民よりも「みにくかった」からというのだ。この日ヒスパニオラ島の北岸で起こったことの記述を引用しよう。

提督は、食料とするアヘスを取りにやるために、美しい浜辺のある陸地へ端艇を差し向けたが、乗組員達はそこで、弓矢を持った数名の男に出会い、彼らと話をし、弓二本と多数の矢を買い取った。そして、そのうちの一人にカラベラ船へ来て提督と話をしてくれないかと頼んだところ、その男が訪ねてきた。彼の顔つきは、今まで見た連中とはかなり違い、ずっとみにくかったと提督はのべている。彼らは、体じゆうにいろんな色を塗りつける習慣を持っていたから、その顔にも墨を塗っていた。頭髮はみな長く伸ばし、後でひくくって束ね、それをおうむの羽根を並べた上にのせていた。この男も他の連中も皆裸であった。提督は、この男は人を喰うカリベ族に違いないと考えた。また、昨日見た湾は陸地と離れていて、一つの島になっているに違いないと思った。……提督はまた、今まで通ってきた島々、ではカリベを非常に恐れていた、エスパニョーラ島では彼らカリブと呼んでいるが、カニバと呼んでいる島もある、彼らはこの地域の島々をすべて荒し廻って、見つけた人間を喰ってしまうという乱暴な者達に違いないとのべている。彼はまた、この地域はきわめて広範におよぶので、言語も違ってはいるが、自分は単語がいくつか判るので、他の言葉の意味もそれから類推できたし、同伴しているインディオ達は自分よりさらによく理解できたとのべている<sup>12)</sup>。

まず先に引用した一二月三日の記述から二カ月近くを経て、コロンブスが現地の言語に対する自信がついたと主張していることに注意しよう。コロンブスによる言葉の理解能力の進歩の自覚が、「カリベ族」を断定するさいのひとつの根拠になっていると思われるからだ。つまり彼が「カリベ」「カリブ」「カニバ」などとさまざまに聞いたとされる「カニバル」が、シニフィアンとしてシニフィエを恣意的に拘束し、「人を喰うカリベ族」として固定される瞬間が、ここには見事に活写されているのである。

ここでひとまず、「カニバル」の言語的歴史を概括すれば、次のようになるだろう。一四九二年一二月三日にコロンブスが記した「カニバル」なる音が、まずスペイン語とほ

かのヨーロッパ言語に導入されたわけだが、それはコロンブスが後に噂として住民から聞いた「カリベ族」と呼ばれる一群の人々を指していた。「カニーバル」と「カリベ」とを同一化するためのカギが「食人」の習俗だった。だがしだいに「カニーバル」（食人種）と、「カリブ」（アンティル諸島の先住民）との区別が、言語的に行われるようになる。「カニバリズム」という習俗を表わす一般用語が導入されるのは、ずっと後になってからのこと（『オクスフォード英語辞典』の初出例は一七九六年）で、それによって、行為と人々との区別が完成されたのである。

### 記号から実体へ

先に引用した一月三日の記述は、一月二三日に発見された「カニーバル」という未知の音が、「カリベ族」という実体を得て、記号として独立する日を書き加えるものにほかならない。それはコロンブス以降、多くの航海者や作家たちを魅了した「カニーバルの住む島」という伝説を生むだけでなく、カリブとアラワクという二項対立（コロンブスが前日見たという「湾」が別個の「島」として、それぞれを分かつ境界線が形成されるように）をも生産し、良き先住民の懐柔と悪しき先住民の撲滅という植民地主義的な暴力を支える論理となっていくのだ。一月二三日に存在したまなごしの相互性、対話的複数論理はここにはない。代わりにここにあるのは、一方向的な観察と、記号による指示対象の暴力的な支配である。この「男」が弓矢を携えていた、つまり武器運用能力と勇気とを兼ねそなえているらしいということを除けば、コロンブスの「人を喰うカリベ族に違いない」という断定は、外見つまり服装と顔や体の装飾に基づいている。さらに見逃がしてならないことは、コロンブス自身、「この男も他の連中も皆裸であった」と言っているように、外見のみの判断によって、「カリベ族」とそれ以外の者たちとを隔てる境界線は、記号の使用者の解釈にしたがって、いくらでもズラしたり、拡大したりすることが可能だということである。いわば「良きアラワク」と「悪しきカリベ」とを区別するのは、目に見えない内面的性格でしかない。一方は「生まれつき」柔和で従順、よってスペイン人に協力的でキリスト教を恐れ、食人種を恐れている。他方は全てその反対の性向を保持する、いつその武器を使用するとも限らない者たちというわけだ。

同じ日の記述でコロンブスは、住民たちによるスペイン人攻撃の一件について述べ、「この地の者はおそらく悪行の衆で人を喰うカリベの者達だ」と再び同定している<sup>13)</sup>。キリスト教徒という自分自身のアイデンティティに対立する者、それを攻撃する者のアイデンティティは、自身とは対極にあるはずの「食人種」でなければならない。こうなると、スペイン人の命に服さない者、協力を拒む者、そして武器をとって闘おうとする者すべてが、「人を喰うカリブの者達」と同定されて、何の不都合もなくなる。いや彼らが実際に食人種である

かないかも、もはや問題ではないのだ。要は記号の力を信じて、自らにとって都合の悪い対象に「カニーバル」の名を押しつけ、抹殺してしまえばよい。この日の記述をしめくくる次の一文が、まさにその後の征服と暴力的支配を予期している。

そして彼らは、カリベ族でないにしても少なくともその隣人で、カリベ族と同じ習慣を持っているに違いなく、他の島々の、全く臆病で武器も持っていない連中とは異り、恐れを知らぬ者達なのである。……提督はこの連中を数名捕えたいと願っていた<sup>14)</sup>。

反抗する者は全て「カリベ族か、その隣人」として抹殺するか、あるいは奴隷として使役しよう。到着後三カ月を経て、期待したように黄金も宝石も得られないコロンブスは、ようやくにしてその代わりとなる実体として、奴隷の獲得を本気で考えるようになる。そのために決定的に重要なのが、「カニーバル」記号の恣意性だったのである。黄金とカリベとの互換性、この日以降コロンブスは黄金についての情報よりも、なるべく多くの「カリベ族」を捕えることに熱心になるように見える。結局のところ、コロンブスは「本物の食人種」には出会うことができず、その代わりに「カニーバル、カリベ」という名前を発明したので。

### 征服と記号の恣意性

我々がもし発見について語ろうというのなら、この地域の住民こそがコロンブスたちを強欲で残忍な征服者として発見したのだ、と言わねばならないだろう。だがここで決定的なことは、たとえ住民たちがコロンブスらを「人を喰う者たち」として恐れたにしろ、彼らは決して「コロンバル」などといった名前を発明することはなかったし、またたとえ発明したとしても、それが言説として流通することはなかったということだ。かくしてヨーロッパ語の一方的な流通とともに、記号の指示対象にたいする恣意的支配力は、人間関係の根本にある相互性の絆を断ち切ってしまうのである。

スペイン人がこの島々にやってきてから数年で、「カリベ族」と呼ばれた人々は死滅してしまい、もはやその語が原地語で何を意味していたのか、そもそもそうした語が存在していたのかどうかも、永久に分からなくなってしまった。それにもかかわらず、例えば『オクスフォード英語辞典』が如実に示すように、「カリブ」を引けば「カニーバル」と説明され、「カニーバル」を引けば「カリブ」と出てくるような同語反復的な神話はいまだに健在だ。辞書は「起源」と「意味の安定性」にこだわるあまり、ある言葉の発生時に存在した偶然の事情と、その後の権力関係の変遷をたどることはしない。こうして本当に人を食うという究極的な反抗の姿勢をとる能力を持っていたかもしれない住民たちが消滅しても、「カニーバル」記号自体はひとり歩きして、時と場所を変え、南北アメリカ大陸、アフリカ、アジア、

太平洋の島々にその対象を求め続け、その道程で暴力と排除の爪跡を刻んでいったのである。

アンティル諸島の先住民たちのなかに、かりに食人の習慣が社会的様態や宗教的儀式として実際に存在したとして、それがあつた民族の虐殺を正当化し得るだろうか？ この問いに対する答えは、一六世紀にミシェル・ド・モンテーニュがすでに提出している。一五六二年に当時「食人の習慣」で有名だつたトピナンバ族に、フランスのルーアンで面会したモンテーニュは、ヨーロッパ人についてもっとも印象に残つたことは何かという問いに対する、トピナンバ人の答えを次のように記録している。

ヨーロッパ人のなかには、あらゆる種類の品物や財産を貪り食つているものたちがいる一方で、貧しく必要に迫られて門口で物乞いをするような飢えた人々もいることがわかつた。不思議なのは、それほど困窮している人たちがこのような不正を堪え忍んで、金持ちたちの喉笛につかみかかることもせず、家に火をつけたりすることもなし、ということだ<sup>15)</sup>。

モンテーニュがここで、ヨーロッパ人によつてまさに植民地化されようとしている土地の人々の口を借りて提出するのは、次のような修辭疑問だろう——「本物の食人はどちらか、ヨーロッパ人だろうか、それともその他者だろうか？」

コロンブスが発見したのは、「インディアン」でも「アメリカ」でもなく、植民地主義の欲望によつて、シニフィエを恣意的に選択し支配する「カニーバル」というシニフィアンだつた。この恣意性が相互性に基つていることを確認するためには、モンテーニュによる「食人」の定義がやはりふさわしいだろう。

普通考えられているように、それで食べた本人が栄養を得る（かつて古代のスキタイ人たちがそうしていたように）ことではなく、説明不可能な究極の復讐形態なのである。……われわれがそうした行いをいかに野蛮であるかを言いたて、彼らの間違いを非難しながら、自分たちの過ちに盲目でいることは、残念どころか、悲しむべきことと言わねばならない。私の考えでは、死んだ人間の肉を食するより、人を生きたまま食う方がずっと野蛮だ。拷問や暴力で生きて感覚のある体を引き裂き、手足を焼き、犬や豚にそれを食わせる（そうしたことがあつたことを私たちは読んで知っているばかりか、昔の敵に対してではなく、自分たちの隣人や同胞市民に対して、そのような行いがあつたのは我々自身の記憶に新しいところだ、それもなお悪いことに、敬神だの宗教だのの名の下にそれが行われたのだ）ことの方が、死んでから焼いて食うことより、よほど野蛮ではないだろうか<sup>16)</sup>。

モンテーニュのように人を食うという行為が、決してひとつの文化に限つた現象ではない

こと、そしてそれが言説としてイデオロギー的支配力を持った時の危険を察知していた者は、コロンブスたちの同時代にも少数だがたしかに存在したのである。

食人言説を考えること、その原点には、一四九二年におけるコロンブスの発見という「アンソロポファガイ」から「カニーバル」へのパラダイムシフトに潜む相互性の契機とその隠蔽がある。二つの名前によって指示された行為が、実質的には同じものであるにもかかわらず、国民国家言語の創出とそれを「伴侶」とした帝国の建設が、「カニーバル」という近代特有の用語を必要とし、それを言説として流通させていく。その過程で「食人」行為そのものの持つ境界侵犯性と抵抗力は無効化され、その担い手であった先住民の排除を正当化していった。ヨーロッパ植民地主義言説の根幹には、このような「食人」行為と「カニーバル」記号とのせめぎあいが隠されているのである。

注—————

- 1) たとえば、田中利幸『知られざる戦争犯罪 日本軍はオーストラリア人に何をしたか』（大月書店、1993年）第四章。ニューギニア戦線での「捕虜虐殺事件」を追及した奥崎謙三を主人公とした記録映画に随伴する原一男・疾走プロダクション編著『ドキュメント ゆきゆきて神軍』（教養文庫、1994年）など。
- 2) P.P. リード『生存者 アンデス山中の70日』永井淳訳（新潮文庫、1982年）。この事件では体験者たちが敬虔なカトリック信者だったために、宗教儀礼である聖体拝領と生存のための食人との比較をめぐる興味深い考察が本書の随所に見られる。
- 3) たとえば、中野美代子『カニバリズム論』（福武文庫、1987年）15-115頁、マルタン・モネステイエ『図説 食人全書』大塚宏子訳（原書房、2001年）第5章を見よ。
- 4) モネステイエ、前掲書第11章に、近年の「食人犯リスト」がある。
- 5) たとえば、今村仁司『排除の構造——力的一般経済序説』（勁草書房）、赤坂憲雄『異人論序説』（ちくま文庫、1985年）、アロン・ホワイト、ピーター・ストリブラス『境界侵犯 その詩学と政治学』本橋哲也訳（ありな書房、1995年）などを見よ。
- 6) Edmund O'Gorman, *The Invention of America: An Inquiry into the Historical Nature of the New World and the Meaning of Its History* (Bloomington: Indiana University Press, 1961).
- 7) Ivan Illich, *Shadow Work* (Boston and London: Marion Boyers, 1981), p. 34.
- 8) 『コロンブス航海誌』林家永吉訳（岩波文庫、1977年）、101-102頁。
- 9) Philip P. Boucher, *Cannibal Encounters: Europeans and Island Caribs, 1492-1763* (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1992), p. 139n.
- 10) ヘロドトス「歴史」（松平千秋訳、岩波文庫）中巻、63頁。
- 11) Edward Arber ed., *First Three English Books on America [?1511]-1555 A.D.* (Birmingham, 1885), p. 50.
- 12) 『コロンブス航海誌』、204-5頁。
- 13) 同上、206頁。
- 14) 同上、207頁。
- 15) Michel de Montaigne, *The Essayes of Michel Lord of Montaigne*, trans. John Florio (1603), ed.

食人言説の詩学と政治学

Henry Morley (London and New York: George Routledge & Sons, 1886), p. 86.

16) *Ibid.*, p. 96.

\* 本論考は、2008年度東京経済大学個人研究助成費（A08-18）による研究成果の一部です。記して関係諸氏に感謝申し上げます。